

メディアとしての江戸文化における果蔬

伊藤 信博

1. はじめに

安政五年（1858）に長崎で始まったコレラは七月末から江戸で流行し、一ヶ月間で江戸での死者が二十万人を越えたとされている。そして、その翌年十月に江戸の辻岡屋から板行された「青物魚軍勢大合戦之図」と題されるコレラに関する画がある。早稲田大学や東京大学図書館が所蔵する三枚続き（36×77cm）の錦絵である。

青物と魚貝類の戦争を描き、青物がコレラに罹らない食物で、魚貝類はコレラに罹りやすい食物と見立てられているのである。向かって右が青物で、玉蜀黍、蜜柑、唐辛子、山芋、松茸、南瓜、冬瓜、大根、蚕豆、茄子、慈姑、葡萄、真桑瓜、西瓜、百合根等が描かれる。左側の魚貝軍は鰯、ホウボウ、蟹、鰹、サザエ、蛸、トビウオ、鯰、鯛、鰻、鮪、河豚等が描かれ、青物軍勢が優勢となっている。

青物がコレラに打ち勝つと見立てたこの錦絵は、青物と魚貝類の戦いであると同時に、幕府と水戸派の争いの見立図でもあり、冬瓜が井伊直弼、蜜柑が徳川家茂、蛸が徳川斉昭、鯰が松平大学等、裏側に各武将の実名も記されている。

このような果蔬を擬人化した作品には、例えば、年代が近いものでは、天保十一年（1840）発行の木版一枚摺りである「青物年季證文之事」がある。明治十三年（1880）に冊子体で出版された江戸後期の様々な時期に一枚摺りで出版された番付表を収集した「番付集」である『浪花みやげ』（大阪市立中ノ島図書館蔵）に所収され、また三井文庫も一枚摺りのみで所蔵している摺物である。江戸の資料でよく見受けられ

る「奉公人請証文」という身売り証文を参照に、果蔬を擬人化し、パロディ化したものであり、この摺物の内容を翻刻すると以下のようになる。

「一此せりと申
女、出生ハみかん
之國ちんぴごほり
ゆうかうじ村、心
松茸せう路成者ゆ
えかうたけきうり
様へごほうかうか
うにさんせう仕候
所実正也。然る上
ハウどの三月ヨリ
芋の三月迄中年九
ねんぼうとあい定

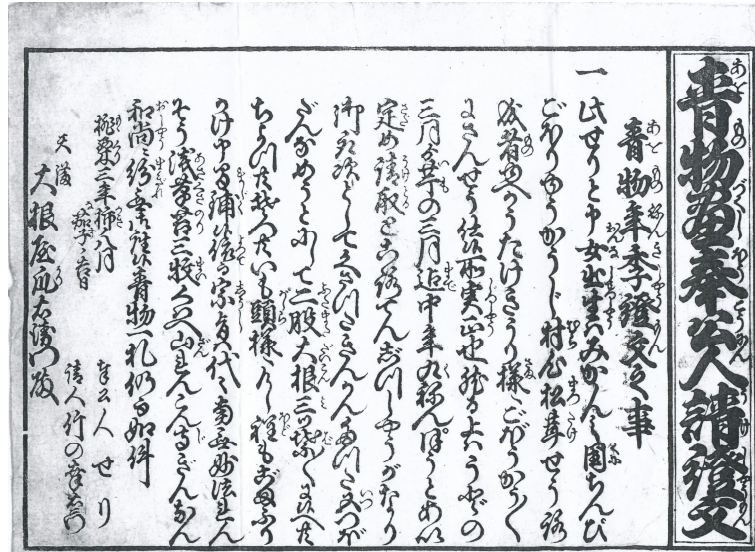


図1 三井文庫所蔵

め請取ところてんじつしょうがなり。御取次としてくさつたきんかん
たつた五つぼ。だんなめうとにして、二股大根三つ葉三つ葉に候へ共、
ちよつ共そつ共、いも頭様へのし程もごまふりかけ申間鋪候、依而宗
旨ハ代々南妙法れんそう浅草苔三枚くハへ山れんこん寺ぎんなん和尚
ニ紛無御座候、青物一札仍而如件。桃栗三年柿ノ八月 奉公人 せり。
茄子ノ吉日 請人 竹の幸右衛門 天満大根屋瓜右衛門殿」(図1)。

ところで、植物を擬人化して戦わせる主題では文明年間以前(1469
年以前)の成立といわれる『精進魚類物語』が有名である。また、植
物の擬人化は室町時代から少しずつではあるが、歌謡や物語の中では
語られている。しかし、擬人化して画に取り上げられるのは江戸以降
しか現在見つかっていないと思われる。

そこで、江戸時代における果蔬の擬人化に注目し、江戸文化の中で、
果蔬がどのような文化的位置におり、擬人化されたり、パロディ化さ
れたりしたのか、また描かれるに至った経緯がどのような理由である
のか、江戸時代におけるメディア発信の文化的特徴も含め、考察して
みたいと考えている。

2. 果蔬と江戸の博物学

江戸時代の画家として名高い伊藤若冲（1716～1800年）の作品にも、「果蔬涅槃図」¹⁾（1779～1782年頃の作品）と題される青物尽くしの水墨の掛幅（縦181.7×横96.1cm）がある。

若冲は京都・錦市場で青物問屋「枿屋」の主人であったことや深く仏教に帰依していたことから、全ての生き物、心を持たない植物でも成仏するという『天台本覚論』『三十四箇事書』、「草木成仏事」条²⁾の「草木国土悉皆成仏」思想からこの作品を描いたとも言われている。

ところで、この「果蔬涅槃図」では、釈迦を二股大根に見立て、周りに多くの野菜や果物が配置されており、一般には「涅槃図」の「戯画」、「見立絵」と目される作品である。沙羅双樹の下で頭を北に、顔を西に向け、右脇を下にした釈迦が絵の中央に当る位置に横たわり、周りの弟子や衆生が釈迦の入滅を嘆いている図柄は、江戸時代にも多くの見立図の主題となっているのである。

江戸時代には「涅槃会」（釈迦入滅の日・旧暦二月十五日）において、「涅槃図」を基に「絵解き」が盛んに行われ、面白おかしく、釈迦の人生や仏陀の尊さが語られた。そして、「果蔬涅槃図」のような作品は、「業平涅槃図」（英一蝶作／江戸中期）、「芭蕉涅槃図」（鈴木芙蓉作／江戸後期）、「死絵」³⁾としての「役者涅槃図」、「鯨涅槃図」⁴⁾等と同様に、追悼や笑いの対象として釈迦に見立てた人物が多く描かれている。

その点から見れば、「涅槃図」の意味するところが庶民層に深く理解されていなければ、このような作品の誕生はあり得ず、江戸時代における「変わり涅槃図」⁵⁾は、一定の社会層に向けた新たなメディアを利用した文化発信とも言えるであろう。⁶⁾

ところで、「果蔬涅槃図」には、八十八種類の野菜や果物が描かれているが⁷⁾、沙羅双樹の替わりに、玉蜀黍の茎を数も同数で、右側は生き生きと、左は萎びた状態で描く点も、伝統的な「涅槃図」の描き方を踏襲している。

そして、安永末から天明初期（1779～1782年頃）にかけて、日本人がどのような野菜や果物を食べていたのかもこの画から良く分かる。特に大根、蕪、茄子、瓜、里芋、キノコの種類が豊富に描かれていることから、これらの種類が多く耕作されていたり、山で採取されてい

たりしたことが想像できるのである。

事実、『享保・元文諸国物産帳』から野菜の生産高の平均を求めると、トップは大根で、12.1%、他の野菜の上位は、蕪は 3.8%、里芋類、5.5%、茄子、4.7%、瓜類、5.3%となる。この資料からは江戸時代の食文化における上述した野菜の比重の高さまで計ることが出来るのである。

「青物魚軍勢大合戦之図」に描かれる果疏も『享保・元文諸国物産帳』には全て示されており、上位を占めている。また、大阪には、文久三年（1863）に出版された『改正増補国宝大阪全図』⁸⁾所載の「大阪産物名物大略」がある。

この資料には大阪の名物が記され、天王寺蕪、宮の前大根、守口細大根、天王寺大根、天満白大根、田邊大根、木津干瓢、難波村胡蘿蔔、木津冬瓜、倉橋大根、玉造黒門白瓜、毛馬胡瓜、市岡西瓜、九条茄子、本庄茄子、小松茄子、鳥養茄子、吹田烏芋等、「青物魚軍勢大合戦之図」に描かれている主要な野菜も記されているのである。

そうした果疏の中では、若冲の「果疏涅槃図」が釈迦を配する場所に二股大根を配するように、大根の評価が非常に高いことが分かる。

例えば、この時代には多くの農業に関する出版物があるが、元禄十年（1697）に出版された農書として最古のものとされるのが宮崎安定の著作である『農業全書』で、大根と蕪に関する栽培項目が全十一巻の中で、最大の解説となっているのである。

また、天明五年（1785）には、『諸国名産大根料理秘傳抄』、『大根一式料理秘密箱』、『大根包丁物切方之秘伝』と題される本も出版され、全国の大根料理の特徴や大根の切り方までが詳細に解説されるまでに至っている。

江戸時代、特に中期から後期にかけては、料理に関する出版物も非常に多く、西尾市の「岩瀬文庫」所蔵本に限って見ても、寛永二十年『料理物語』（1643）、寛文十年『料理献立集』（1670）、元禄二年『合類日用料理抄』（1689）、元禄六年『八百屋集』（1693）、安永二年『料理いろは包丁』（1733）、安永五年『献立部類集』（1736）、天明二年『豆腐百珍』（1782）、天明五年『卵料理秘密箱』（1785）、寛政七年『鯛百珍秘密箱』（1795）、同年『海鰻百珍』、嘉永二年『年中番菜録』（1849）、嘉永六年『東都豆腐之伝』（1853）、天保六年『江戸料理通』（1835）等

様々な本が出版されており、この図書館はその他、江戸時代のお菓子に関する著作も多く所蔵する。

このような料理の本だけでなく、この図書館は農業関連、動植物や園芸及び物産品目に関する本も多数所蔵する。例を挙げると、『秋野七草考』、『胡椒考』、『草木奇品家雅見』、『有毒草木圖説』、『諸菜譜』、『菌譜』、『天保六年物産會目錄』、『長崎諸名産物實録秘書』、『野菜博録』、『近江物産誌』、『熊野物産初誌』、『藝藩土産圖』、『動植名彙』、『本草會物品目錄』、『日本山海名物圖會』、『五畿内物産圖會』、『地名米雜穀位覚』、『百姓伝記』、『救荒便覧』、『ききん用心』、『飢饉の時の食物の大略』、『かてももの』、『凶荒録』等である。

上述したような出版に大きな影響を与えたのはやはり吉宗の物産政策が挙げられる。吉宗以前には、薬や砂糖などが大量に輸入され、その代金として、金銀が大量に海外に流出する。そうした輸入を抑え、自給自足を図るため、吉宗は採薬使を派遣し、国内で生産可能な薬物や有用な物産を調査したことが大きな要因となり、全国的に動植物の関心が高まって行ったのである。⁹⁾

また、享保二十年～元文三年（1735～1738）にかけて、全国の産物調査を吉宗は行う。先程例に使用した『享保・元文諸国物産帳』がその結果であり、物産名が方言で記された場合、理解不能との理由から、各藩からの物産調査報告書には、図での説明まで要求し、日本全国における生産物を詳細に把握したのである。

国内だけの調査ではなく、吉宗は海外調査も行い、対馬藩を通し、朝鮮から薬草等を取り寄せ、日本で生産されていないか確認を行う。調査の実施に当たったのは、採薬使に登用された丹羽正伯¹⁰⁾という医者で、植村政勝等と各地の採薬調査を行う傍ら、薬草の栽培を幕府が作った下総薬園で行った。

つまり、日本で生産が無かった植物を新たに栽培する試みであった。寛延元年(1748)刊である田村藍水著『朝鮮人参耕作記』はこのような意図の基に栽培された朝鮮人参の生産記録である。また、中国から西洋の翻訳書も含め、植物学、動物学及び多くの農書も輸入している。

以上のような理由から、吉宗以降、動植物に関する様々な種類の本が出版され始める。例を挙げると、『諸禽万益集』（初期の養禽書）、『日

東魚譜』(始めて出版された魚譜)、『六鯨之図』(鯨やイルカ類の分類、鯨の解体図等)、『勇魚取絵詞』(肥前国の捕鯨)、『琉球産物志』、『蝦夷草木図』等どれも図説が付く出版物であり、鳥類や蝶類を分類した百科事典的な本なども豊富に刊行されるのである。

一方、このような果蔬の作り手達もその豊穰を祝う様々な行事を生み出す。特に大根は豊作の象徴とされ、豊作儀礼として、現在でも滋賀県の一部では、神棚に大根と蕪が置かれる。

そもそも二股大根は大黒や聖天に供物として捧げられる野菜で、豊穰をもたらすと信じられた野菜でもあった。能登では今も冬と春に行われる「あえのこと」の神事において、田の神に豊穰を祝し、または、豊穰を願って捧げられるのは、二股大根なのである。

名古屋市博物館蔵の『御鋤祭真景図略』は、江戸後期には祭りにおいて、大根に似せた大きな飾り物を山車に乗せ、鼠の仮面を被った人々がその山車を引っ張る図を紹介している。この祭りにおける大根と鼠はどちらも豊穰の象徴としての機能を果たしていると考えられるのである。

図2は愛知県稲沢市の旧家に残る大黒天の画であるが、この旧家では、代々結婚式後の新婚夫婦が生活する部屋に飾ったとする伝統を保持し、大黒＝大根の豊穰が多産＝豊かさとの結びつきを示している。



図2 愛知県個人蔵

また、京都の北野天満宮や京田辺市の棚倉孫神社では、十月に芋茎、野菜、五穀などで装飾した瑞饋神輿で町内を練り歩き、豊穰・繁栄を祝う。福知山市夜久野町額田の一宮神社の秋祭りも「つくりもの」と呼ばれる野菜、果物の人形が飾られる。

他の祭りとしては、瓢箪が飾られる太宰府天満宮や千葉県館山市の「里芋まつり」、お盆に瓜やササゲを飾る新潟市の祭り等、「果蔬涅槃図」や「青物魚軍勢大合戦之図」に描かれる主要な野菜を祀る祭りは

数多い。夏祭りの供物にも瓜類や茄子類を挙げることができ、この点からもこれ等の果蔬と豊穰の祈りとの関連性が考えられるのである。

このように「青物魚軍勢大合戦之図」に描かれる玉蜀黍、橙、唐辛子、山芋、松茸、南瓜、冬瓜、大根、蚕豆、茄子、慈姑、葡萄、真桑瓜、西瓜、百合根等は庶民と深く結びついている。

以上のような事実を踏まえ、天保七年（1836）に刊行された六十四種類の果蔬の漬け方を紹介する農書『漬物塩嘉言』により、「青物魚軍勢大合戦之図」の野菜や果物がどのように紹介されているかを調べると以下のようなになる。

- ・ 大根：沢庵漬（三年漬、五年漬、七年漬）、百一漬、きざみ漬、浅漬、糠味噌漬、味噌漬、粕漬、巻漬、阿茶蘭漬（干大根、生姜、茗荷、塩圧茄子、昆布等）、葉附子大根三杯漬
- ・ 茄子：塩漬（大根と併せ漬）、茄子塩圧漬、初夢漬、鼈甲漬
- ・ 蕪：大坂切漬（大根と併せ漬）、天王寺蕪の漬物
- ・ 松ヶ崎浮菜蕪と同類の野菜：京都糸漬
- ・ 瓜：奈良漬瓜、印籠漬、達磨漬、捨小船、雷干瓜、粕漬、麴漬（干瓜）、家多良漬（瓜、茄子、唐辛子等）
- ・ 唐辛子：種拔蕃椒日光漬
- ・ 冬瓜：味噌漬
- ・ 西瓜：粕漬
- ・ 大豆：精舎納豆漬（納豆、瓜、茄子）
- ・ 松茸：塩漬

漬物はまた、飢饉時に欠かせない食料であると勧める農書も多く、後述するが、「青物魚軍勢大合戦之図」に描かれる玉蜀黍、蜜柑、唐辛子、山芋、松茸、南瓜、冬瓜、大根、蚕豆、茄子、慈姑、葡萄、真桑瓜、西瓜、百合根等をこれらの農書は飢饉用食物とも記している。

また、伊藤若冲より後の画家である呉春¹¹⁾にも「蔬菜図巻」があり、画には筍、胡瓜、笹下、白瓜、茄、唐辛子、葉生姜、豌豆、南瓜、ナタマメ、里芋、大豆、茗荷、コウタケ、椎茸、シメジ、ヒラタケ、大根、百合根、水菜、チョロギ、蕪、人参、フキノトウ、独活、慈姑等が描かれている。

以上のように、画を通して、花鳥風月ではなく、様々な野菜の種類

が庶民の間にも画として広く浸透して行ったのが江戸時代であり、「青物魚軍勢大合戦之図」のような果蔬の見立文化には欠かせない植物の知識を多くの人々が正確な情報として持っていたことが分かるのである。

3. 外食文化の隆盛による見立番付の発展と見立文化

さて、このように日本全体の産物が把握されるようになるのと同時に、物流の移動も活発になり、東海道が整備される等、交通網も益々発達する。お伊勢参りなども盛んに行われ、各地の名物ガイドブックの出版も流行するのである（岩瀬文庫が所蔵する版本の例を挙げると、『駿河土産』、『江戸土産』¹²⁾等がある）。

また、江戸では参勤交代などで、居住者の多くが男性単身赴任者となるが、このような上京者に対するガイドブックも出版され始めるのである（岩瀬文庫所蔵は『江戸買物案内』、『江戸買物獨案内』¹³⁾、『江戸名所四十八景』、『江戸名所圖會』等）。

ところで、単身赴任の下級武士は下屋敷の長屋に住み、交代で炊事を担当するが、特に文化・文政時代から、安い外食産業も発達し始め、外食することも多くなる。天保十一年頃（1840）に描かれた江戸東京博物館蔵の『久留米藩江戸勤番長屋絵巻』はそのような江戸での長屋生活における飲酒風景等を描いている。

また、例えば、武蔵国忍藩尾崎準之助貞幹による彩色が施された草絵や食事風景の絵も多い『石城日記』（慶応義塾大学所蔵）から、文久元年（1862）六月十五日から同二年四月二十七日の十ヶ月の外食記録を計算してみると、以下のようなになる（この時の尾崎準之助貞幹の年齢は三十四～三十五歳）。

文久元年六月十五日～二十一日は、外食率：36%、文久元年七月一日～四日（二日を除く）、外食率：50%、文久元年八月二日及び五日の外食率：25%、文久元年九月一日及び三日～九日、外食率：43%、文久元年十一月一日～十七日（十一日、十四日を除く）外食率：54%、文久元年十二月一日、六日～十一日、十六日～十七日、二十一日～二十二日、外食率：23%、文久二年一月一日～六日、九日～十日、十二日～十三日及び二十八日、外食率：32%、文久二年二月五日～六日、

十日～十四日、十七日～十八日及び二十二日、二十六日～二十八日、
外食率：50%、文久二年三月二十日～二十一日及び二十三日、二十五
日～二十七日は外食率：45%、文久二年四月二日～四日、八日～九日、
十二日、十六日～十七日、二十二日、二十七日、外食率：42%。

この統計からは、尾崎準之助の外食率はかなり高いことが分かる。
また彼は料理が得意であり、友人達に手料理を振舞っていることも日
記には記されていることから、料理が苦手なための外食でないことは
明らかである。

彼が生きた時代には、外食産業の多くの種類において、屋台での営
業が見られ、路上で売られた食べ物は、心太、冷水（砂糖入り）、白玉、
ゆで豆、ゆで玉子、汁粉、甘酒、白酒などで、江戸、大坂、京都で販
売された記録が文献に記されている。¹⁴⁾

江戸の屋台で販売された食べ物には、蕎麦、握り鮓、天麩羅があり、
鮓と天麩羅は天明期頃（1781年～）に流行し始め、文化期頃（1804
年～）から屋台で売られたことが分かっており、職業の詳細な説明、
食べ物の種類までもがそれぞれ画でも解説されている。

文化二年（1805）に出版された『熙代勝覧』には、江戸の中心街で
あった日本橋から今川橋において、店舗を構える店として、蕎麦屋、
寿司屋、一膳飯屋、居酒屋、菓子屋、仕出し屋、汁粉屋などが描かれ
ている。通町筋の全店舗の合計は百一軒で、その内の十九店舗が食堂
など外食産業に携わる店である。

このような外食産業の発達や諸国の物産への理解を庶民層にまで大
きく広げたのが、ユーモラスさを競った見立図から発展した「見立番
付」で、相撲の番付表のように、神社仏閣から名物まで何でもランク
付けしてしまうものである。中には、「名医番付」や「美人番付」また
は「悪妻番付」などもあるが¹⁵⁾、ここで注目したいのは、やはり食料
関係の見立番付である。

上述した「大阪産物名物大略」を番付にしたものから、江戸の区域
毎に別けた、美味しいものを食べさせるレストラン番付のようなもの
まで存在する。例えば、天保十一年（1840）の「包丁里山海見立相撲」
では野菜、茸、魚類のランク付けを行っており、文化五年（1808）の
『浪速みやげ』に所収されているのは「青物料理の献立」で、野菜の

ランク表である。

その他にもおかつのランク表「日々徳用儉約料理角力取組」、「江戸会席料理老舗番付」、「江戸自慢蒲焼茶漬番付」、「御料理献立競」、「諸国産物大数望」、「大日本産物相撲」、「東海道五十三駅名物合」、「銘酒づくししんばん」、「かつほぶし位評判」、「即席会席御料理」、「尾陽名物」等の料理や産物の名物見立番付が数多く出版されている。

こうした江戸時代の番付表は三都と呼ばれた江戸、京都、大阪を中心に出版されているが、名古屋、金沢、仙台にも少なからず存在する。最後に挙げた「尾陽名物」などは名古屋の名物番付であり、現在も時々このような江戸時代に製作された地方の名物番付が発見されている。

今日の旅行ガイドブックに掲載される「美味しい店」リストと同様に、カラーの絵入りで紹介されることも多く、吉宗の政策による物産調査が大きく発展し、庶民、下級武士に対して、これらの番付表はメディアを通した新しい文化発信の中心となったとも言えるであろう。

このような点から言えば、時代を越え、領域を超えて、ある文化主題が強靱な生命力をもって受けつがれる日本文化の特色の一つが、江戸文化においても明確に現れていると判断できる。

絶えず姿を変え、多様な領域に、互いに響きあいながら、遷り変り、人々に深く働きかける信仰、文化のメッセージとなって、その時代の世界を変革していく“知”の発信行為が日本の文化伝承の特徴であったからである。そして、江戸時代に発展した文化に何よりその力を与えたのは図像に他ならないのである。

日本において図像の威力が最も力を発揮したのは、古くは仏教であり、信仰であった。仏像や浄土変、曼荼羅として「聖」の輝かしい姿や他界の荘厳な形象が鮮かな彩りと共に、人々の憧憬の的となる。そして、その文化創造は、常に物語を伴い、更に新たな文化創造を生み出す源泉でもあったのである。

「涅槃図」から「見立涅槃図」へ、曼荼羅から熊野観心十界図、そして熊野比丘尼によって唱導された地獄図の絵解きである「浄土双六」¹⁶⁾へ発展した文化創造がその典型であろう。

江戸時代において、こうして物語や説話も、絵巻や絵本という絵物語となって展開し、享受されたのである。そして、社会を構成する諸

道芸能と職人の生業、その生産物も悉くイメージ化され、表象されるばかりでなく、新たな様式を持った図像を見立図等で創出していく。

博物誌としての本草書や地誌としての図絵なども同様で、イメージ化される文化の領野は江戸において、限りなく広がっていったと言える。こうして、人気が高かった相撲番付を見立てた様々な見立番付が創造されてきたのである。

ところで、東京堂出版『江戸時代 落書類聚』三巻から、江戸時代における落書に果蔬がどのように表現されているかを調べると、先ず、宝永落書には「廻向文」として瓜や豆が出てくる。また「献上物之覚」として、「恥かいても命長芋」、「追付菊之間つくねいも」、「最もあぶ梨子」などの駄洒落での政治批判が表現されている。また、「御馳走之献立」にも同様に食べ物を使った駄洒落が記されている。

天保の飢饉を皮肉った「高く払いましよ玉落とし」や「不祝儀御献立」も同様で、果蔬を使用した世相に対する皮肉が記されている。この『落書類聚』には『野馬台詩』をなぞった「野暮台詩」、漢詩、狂歌等様々な形で、世相が表現されているが、果蔬に関しては、最初に挙げた「青物年季證文之事」のような地口か献立表を借りたユーモラスな政治批判が中心である。

そこで「青物魚軍勢大合戦之図」が描かれたコレラの流行という背景、つまり疫病退散を祈る信仰から考察すると、吉宗の物産政策以前に中国から輸入され、江戸文化の多くに影響を与えた『本草綱目』¹⁷⁾等の農書や医学書がこの錦絵に与えた影響が分かる。

病気退散を目的とした「麻疹絵」や「コレラ絵」、「疱瘡絵」には絵に特定の要素があり、以下のように分類できる。

- ① 殴打、威圧などで病気退散を描くもの。
- ② 神・仏への祈願。
- ③ 魔除け。
- ④ 病気に良い物と悪い物を描く。
- ⑤ 養生者を描く。
- ⑥ 世相批判。
- ⑦ 世相風刺。

このように分類すると、この錦絵「青物魚軍勢大合戦之図」は上述

した特徴のいくつもの項目を兼ね備えた見立図であることが分かるのである。「内藤記念くすり博物館収蔵資料集④」『はやり病の錦絵』には、薬と病の合戦図（「薬と病退治の図」¹⁸⁾）、麻疹に罹らなくて済む呪いとして、擬人化された金柑、麦の穂などが描かれている。

その他、麻疹、厄病、コレラ、熱病時の食物について、「青物魚軍勢大合戦之図」と同様の構図、目的の錦絵も紹介されており（「麻疹能毒合戦圖」¹⁹⁾）、白瓜、蒟、薩摩芋、金柑、栗、松茸、橘等の果疏も善玉として、擬人化され、描かれている。

「麻疹禁忌荒増」²⁰⁾では、麻疹養生に良い食物、悪い食物と分類し、擬人化された果疏が列挙されている。また、見立番付もあり「麻疹能毒養生辨」²¹⁾と題されたこの番付には、黒豆を大関とし、人参、インゲン豆、大根、里芋類が記されているのである。また、絵付きの一覧表の見立番付『麻疹に禁物、麻疹によろしき物』等にも食べて良い果疏と良くない果疏が紹介されている。

このような背景には江戸期において、「本草学」及び物産研究を進める段階で、巧みに図を描き、暮らしに関わる一般の人々にも説明しようとする江戸の博物学が科学的資料として高い水準に達していた事実があり、啓蒙書の発達により、人々を様々な方法により救おうとしていたりしたからでもある。

そして、この「本草学」の影響下により、上述した病気退散や飢饉などの生命等が危険に晒された時などにこうした見立図や絵入りの解説書が多く出版されるのである。例えば、享保二年（1717）刊の中条菰戸著『かてもの』²²⁾は、飢饉用の食料として、蓮実、蕨、蕨の粉、豆類、山葵の他、漬物を記し、大根、蕪、芋の茎、山芋、慈姑、山芋、ムカゴを挙げる。

宝暦五年（1755）刊の建部清庵著『民間備荒録』²³⁾は、飢饉用食物として、栗、蓮実、桃、蓮根、里芋、烏芋、山芋、黄芋、蕨、蕨の粉、青芋、筍、鳩麦、菱子、山椒、慈姑、鬼灯、百合根、アケビ、大根や豆類、蔓系植物等を記し、同人著で、天保四年（1833）刊の『備荒草木図』は百四種類の飢饉用食物を図で解説し、山葵、黄芋、青芋、蓮実、糸瓜、菱子、鬼灯、山椒、林檎、梨等を記す。

天保八年（1837）中山美石著『飢饉の時の食物の大略』にも、鳩麦、

敗荷、蓮根、蓮の実、ツクバネ、青芋、蕨、百合根、慈姑、同年刊の白鶴義齋著『救荒便覧』²⁴⁾にも飢饉時には、漬物を用意することを勧め、飢饉用食物として、栗、柿、葡萄、大根、菰（蕪）、ササゲ、豌豆、青芋、黄芋、蚕豆、玉蜀黍、百合根、慈姑、烏芋、葱、芹、人参や牛蒡等を挙げる。

また、『有毒草木圖説』、『救餓録』、『救荒事宜』、『ききん用心』、『饑年要録』、『荒歳流民救恤圖』等、飢饉用の保存食や食料を紹介する本も数多く出版され²⁵⁾、『有毒草木圖説』²⁶⁾や『救荒事宜』²⁷⁾等は、飢饉の時に飢えた人々が食料として食べないように、有毒草木を正確な色付き図で説明もしているのである。

このように見立図は、「変わり涅槃図」や地獄図の絵解きから発達し、追悼を笑いや遊興の対象、世相批判とする風潮も強く残しながらも、出版文化の隆盛により、生命の危険時に、人々の啓蒙にも役立つメディア情報としての多大な役割も獲得していくのである。

「青物魚軍勢大合戦之図」は上述した植物を擬人化して戦わせる『精進魚類物語』が元となっているとされる。『精進魚類物語』は「一名魚鳥平家物語」とも記されるが『平家物語』のパロディであり、「祇園林の鐘の声、聞けば諸行も無常なり、沙羅双林寺の蕨の汁、盛者ひつすひしぬべきことわりをあらわす。おこれる炭も久しからず。美物を焼けば灰となる。猛猪も遂には刈藻の下の塵となる。(後略)」²⁸⁾と記され、完全な地口の世界である。

しかしながら、こうした駄洒落や見立文化はただの笑いやパロディ、嗜虐の世界を描くだけではない。拙稿「果蔬涅槃図と描かれた野菜・果物について」²⁹⁾で、伊藤若冲の見立画とされる「果蔬涅槃図」から考察したように、若冲晩年のこの作品は豊穰を祈るため、大根飯等、飢饉時に五穀の代わりとなる全国的に多く生産された大根を中心に配置し、大根を補助する食料として、京都の庶民にも良く知られる保存・緊急用の食物でもある名物野菜・果物を周りに配した画でもある。

そして、このような保存食料も含め、果実や山で自生し、摂取可能な山菜種も画の中に会衆として配される「青物尽くし」の構図は、人々に飢饉時の対策を知らしめるためであり、描いた保存食となる食材を生きる術として、広く認知してもらう意図もあったのである。

一方、一般に釈迦の死を描く「涅槃図」は死とその死に対する反応を描き出す画題なのであり、喪失に対する絶望が主題の中心となっている。ところが、江戸時代に入ると、追悼の絵の中にユーモアや皮肉までも入れる傾向が表われる。しかし、若冲は絵画を通じて若冲の世界／宇宙、つまり、生と死を描く。彼の描いたどの画にも、全体的に、生物が沢山描かれているが、必ず腐敗した、枯れた植物も描かれているのである。

このことから、この若冲の「青物尽くし」の涅槃図は、涅槃図の伝統をも踏まえ、ある意味では、人々の命を助ける野菜が死というものを囲んで泣いていることを描いているとも解釈できるのであり、連想、見立てに基づく死に対する厳粛さも含まれる作品とも言えるのである。

江戸の絵物語では、「雅」から「俗」の受容が大きいとされる。古典の受容から始まった絵入りの『伊勢物語』（寛永六年・1630）が『仁勢物語』（寛永十五年・1638頃）、『野郎似勢物語』（寛文期頃成立・1661～72）、『真実伊勢物語』（元禄三年・1690）と最初は語呂合わせのユーモアだけの作品から、時代を経るごとに大きく変化し、芸術の域に達していると、信多純一が指摘している。³⁰⁾

この指摘のように、「見立絵」もただのユーモラスな遊びや嗜虐的表現だけではなく、そのユーモアの中に「本草学」から始まった、植物への描写の的確さ、人々への啓蒙的書や画も含み、江戸時代の高度な文化水準を示す重要な資料となっていると考えられるのである。

4. 結びにかえて

この拙論では、「青物魚軍勢大合戦之図」を題材に江戸における野菜文化と見立文化を考察してきたが、資料不足から幾つかの重要な主題に言及、分析できなかったため、この点を指摘したい。

①植物の擬人化

「青物魚軍勢大合戦之図」のような植物を擬人化した物語は『精進魚類物語』で始まるが、承応二年(1653)刊本の『墨染桜』³¹⁾も、『伊勢物語』、『平家物語』等の古典の引用を多用し、漢字仮名混じりの七五調で作られた植物を擬人化した物語である。

その内容は、大和国吉野里の「八重桜」を「薄」が見初め、契りを

交わす。それを聞いた「梅」が怒り、戦を起こす。「薄」が武蔵野に下り、「草軍」を結成し、「藻塩草」らが加勢する。「梅」は吉野で「花木軍」を組織する。「茶木」と「京蕨」は参加せず、「京蕨」は合戦を見物するのみとなる。鴨川で戦が始まり、最初は「草軍」が優勢で、「花木軍」は鞍馬に退却する。ところが、「花木軍」に「楠木」の援助が入り、逆転勝利となる。「薄」は切腹、「八重桜」は出家し、墨染桜となると記す。

また、時代は下るが安永五年(1776)刊の『化物大江山』は黄表紙本で、恋川春町作・画であり、鯉節、大根おろし、陳皮、唐辛子等の蕎麦の薬味が物語に現れ、活躍する。『酒吞童子』の見立てであり、源頼光が蕎麦、大江山の酒吞童子が饅頭で、当時江戸で流行する蕎麦とその薬味を頼光以下の四天王に見立て、酒吞童子の饅頭を退治し、江戸から追放する物語である。ただし、屋台の蕎麦屋は敵と見なされており、一般の店舗を持つ蕎麦屋から嫌われていた等の世相も垣間見るとも出来る異類合戦物である。

ところで、江戸時代以前において、物語の中では植物の擬人化の例は『精進魚類物語』が最初であるが、画で描かれ始めるのは江戸時代からと考えられる。最も、土佐派の画家の筆で描かれたとされる室町後半の「付喪絵巻」は古道具達の行列であり、無生物の擬人化の最初とは言える。

しかしながら、『百鬼夜行絵巻』（京都市立芸術大学蔵・制作年代は江戸時代と推定される）には、木と大根か蕪の種類の化け物が描かれている。同じく「異本」『百鬼夜行絵巻』（東京国立博物館蔵）では、牡丹、木、瓢箪などが描かれる。特に東京国立博物館蔵の「異本」では、木は「古木之妖化物」と記され、「付喪絵巻」の影響がある可能性はある。しかし、京都市立芸術大学蔵で描かれる大根か蕪の種類の化け物の葉は青々と茂っており、枯れた植物とは思えないのである。

木が妖怪のように描かれる例としては、ギメ美術館蔵の明代（十五世紀）作『水陸齋図』があり、注目に値する。この画には牡丹も妖怪の一部として描かれてもいる。そして、明代後期や清代に至っても描かれた『鬼子母掲鉢図』³²⁾（個人蔵、京都国立博物館 2001 年「ヒューマン・イメージ」展やギメ美術館蔵）にも同様に木が擬人化された画

が描かれているのであり、牡丹と想像される植物も同時に描かれている。

『水陸斎図』は魂の救済を目的とする仏教儀礼に用いられたため、日本にこの画が導入された時に、この画に描かれる木に関する思想も「草木国土悉皆成仏」の思想に適していると素直に受容されたのかもしれない。

このような植物を擬人化する中国の画が日本に入っていた証拠として、幕府御用絵師であった狩野探幽が和漢の古画を模写した『探幽縮図』に『鬼子母掲鉢図』が三点紹介されている点が挙げられる。³³⁾このことから、この時代の前後から、植物の擬人化が木から描かれ、徐々に他の植物に発展していった可能性もあり、仏教における地獄の使者の道具であった火車の擬人化も同時期に始まっているため、江戸時代の無生物の妖怪の擬人化も含め、注目に値する点である。³⁴⁾

また探幽は中国版『花鳥走獸図巻』や『山水人物花鳥図巻』から筍、蕪、茄子、瓜、葡萄、大根等の植物も模写している事実から、この時代に、画家の興味が花鳥風月のみならず、植物全般に及んでいたとも考えられるのである。³⁵⁾

②『本草綱目』から発展した本草学における西洋画の影響

既に述べてきたように、吉宗の物産政策から発展した博物学、物産学などは、国内の動植物の観察、研究を促し、動植物の写実的な図像を生み出す。その集大成が日本で最初の植物図鑑である『本草図譜』である。幕臣の本草学者である岩崎灌園（1786－1842）が文政十一年（1828）に完成させたとされ、自身で写生し、色彩も施している精密な植物図と解説付きの全九十六巻、九十二冊の植物図譜である。

大名でも、讃岐藩松平頼恭（1711～71）、肥後藩細川重賢（1720～85）、薩摩藩島津重豪（1745～1833）等を含め、秋田藩、伊勢長島藩も優れた写生図を残している。³⁶⁾そして、これ等の写生図はどれも対象物に対する即物的な描写に徹している点が注目され、西洋的陰影法を学んだのかとも思わせる技法で描かれているのである。

中国においては、十六世紀末の明時代にイエズス会宣教師であるマテオ・リッチが西欧画法を持ち込んでいることも明らかとなっており、この時代に中国人によって描かれた宗教絵画には、陰影法の影響があ

ることは、フランス国立図書館蔵の『天主降生出像経解』、『天主降生言行紀像』、『進呈書像』（中国の皇帝に進呈されたキリストの一生を描いた図像）などで明らかである。

また、享保二年（1717）にオランダ商館長であるヨアン・アウエルが江戸に参府した折りに、吉宗が所蔵していたヨーン・ヨNSTON著『動物図譜』から様々な質問をしている点やオランダや中国から西洋文化の輸入に努め、殖産興業開発や航海貿易を行ない、優れた写生図である『成形図説』を残した島津重豪がシーボルトと会見している等の点も西洋絵画の技法取得という点で注目に値する。

どちらにしても、享保五年（1720）の漢訳洋書輸入解禁以降、江戸の博物学は徐々に西欧の技法も学んで、発展していったのであろう³⁷⁾。そして、ケンペル、ツェンペリー、シーボルト等がもたらした蘭書の影響も大きいであろう。

例えば、安永二年（1773）以前に日本に入ったとされ、広く参考にされたドイツ人ウエインマン著の『花譜』を幕府のお抱え医師であった栗本丹洲（1756-1834）がその著書『洋名入草木図』で八十六点も転写していることはよく知られている。

また、文政十二年（1829）刊の伊藤圭介著『泰西本草名疏』もツェンペリー著『日本植物誌』に記された学名を対応する和名・漢名にしたもので、スウェーデンの博物学者であるカール・フォン・リンネがその著書『自然の体系』において構築した生物の分類体系も日本で初めて紹介している。

しかしながら、例えば、「果蔬涅槃図」が描かれる前後は、動植物の写実的な図像が情報として、一般に流布し、咀嚼され始める時代でもあるが、時間が流れ、文政年間（1818～1829）以降では「とんだ霊宝」と表される干物で仏を作ったり、戯作の見立絵本が出来たりなど「見立物細工」も流行するのである。

このように、西欧から陰影法など正確な画の技法を仮に学んだとしても、正確な情報を基にしながらも微妙に状態を変えて楽しむ江戸時代の笑いや嗜虐の精神及びその文化的価値観も同時にうかがえるのである。

「見立絵」が誕生する場合、固定化され、イメージとして創り上げ

られた宗教者など歴史上の人物像や想像上の妖怪、また動植物の写実的な図像が情報として、一般によく知られている必要があり、そのイメージの誇張が「見立絵」としての面白さを生んでいるのである。つまり、意表を尽いた発想が好まれたとも言え、写実的な図像が咀嚼され、新たな文化創造の中で生まれたのが、江戸文化の中の見立図と言えるであろう。

例えば、冒頭に例として挙げた「鯨涅槃図」は『狂歌二翁集』（1804年刊）に桃縁斎芥川貞佐の記とともに載る見立涅槃図であるが、鯨と共に多くの魚類を博物学的に巧みに描き、鯨の死を涅槃図の構図で嘆いているように見えて、実は鯨飲馬食の洒落なのである。

しかし、論じてきた点から、庶民に対する啓蒙書のような趣も持つ。少なくとも、ただのパロディである「俗」な絵として評価することなく、その時代全体の歴史、風俗、文化等を含め、考察することで、画の奥に秘められた真実のメッセージの一端に触れながら、江戸文化を担う「見立絵」の奥行きの深さを考えていきたいと思っている。

注

- 1) 現在は京都国立博物館の所蔵。
- 2) 『日本思想大系』「天台本覚論」166～167 ページ 岩波書店 1973 年
- 3) 浮世絵版画で人気が高い役者の死後に、その死を悼み、似顔絵、没年月日、辞世の句、追悼の歌などを記す。八代目市川団十郎を瓢箪に見立てた安政元年（1854）柴田是真作の「ふくべねはんの図」も有名である。
- 4) 明和三年（1766）画、享和四年（1804）刊の『狂歌二翁集』に桃縁斎芥川貞佐の記とともに載る変わり涅槃図である。鯨飲の洒落で、酒好きを表している。
- 5) 釈迦の涅槃図の流布から変容した涅槃図で「高僧涅槃図」、「見立涅槃図」、「死絵」を指す。
- 6) 裕福層には室町時代から江戸時代にかけて書かれた挿絵入りの短編の物語である「奈良絵本」が流行している。「奈良絵本」は、横本・縦本・大型縦本の三種類に別けられ、高価な造本は「嫁入本」とも呼ばれていたとされる。

- 7) 『馬琴の食卓』鈴木晋一著（平凡社新書 2001年）では、六十六種類（31 ページ）、『海をわたった華花』国立歴史民俗博物館編集図録（2004年）（28 ページ）では六十三種類とする。京都国立博物館からの原版を詳細に検討した結果、拙著では八十八種類と考察している。
- 8) 河内屋太助・伊丹屋善兵衛出版。
- 9) 植村政勝著『植村政勝薬草御用書留』宝暦四年(1754)刊には、年の半数近くは諸国で調査がなされたと記されている。また、同著者による『諸州採薬記』では、採取したものを江戸まで送ったことも記されている。
- 10) 同著者による『九淵遺珠』は西尾市岩瀬文庫も所蔵している。
- 11) 松村月溪の画号で知られる。宝暦二年～文化八年（1752～1811）。
- 12) 今で言う宅配便に近いサービス業まで出現する。沢山のお土産を買う旅人のためのサービス業である。また、トラベラーズチェックのようなものまで、両替商が発行するようになる。
- 13) 同書は大坂で出版された。そして、「飲食之部」があり、菓子屋も含め、六百一件の食事関係の店が掲載されている。もっとも、広告料を支払った店しか掲載はしなかったことが明らかになっている。
- 14) 喜田川守貞著『守貞謾稿』を参照。風俗、事物を紹介する百科事典。起稿は天保八年（1837）で、約 30 年間書き続けたとされる。全 35 巻。
- 15) 東京大学資料編纂所が刊行した（2000 年 7 月）『摺物総合編年目録（第二稿）」によると、3,300 点余りの見立番付が現存している。この見立番付は江戸に始まり、明治期に大流行した。今回例として挙げたのは、江戸の見立番付だけである。
- 16) 最古の例は『言国卿記』文明六年（1474）八月八日の条で、「宮御方ニテ、浄土シュコ六アソハサル、予モ御人数也。」と記されている。江戸時代においては、「さて此の双六は南無分身諸仏の六字を、四角あるひは六方の木に書いて目安とし、南閻浮州よりふり出し、あしき目をふれば地獄へ墮、よき目をふれば天上に登り、初地より十地・等覺・妙覺等を経て、仏に止るを上がりとするの遊戯なり。」と柳亭種彦が文政九年（1826）刊『還魂紙料』で遊び方を説明している。
- 17) 李時珍著、1596 年刊の本草書。動植物の形態等の博物誌的記述が優れており、日本に多くの影響を与えたとされる。
- 18) 『はやり病の錦絵』内藤記念くすり博物館 2001 年 8～9 ページ。
- 19) 前掲書 48～49 ページ。
- 20) 前掲書 82～83 ページ。
- 21) 前掲書 88 ページ。

- 22) 岩瀬文庫所蔵本。
- 23) 同上。
- 24) 同上。
- 25) 全て岩瀬文庫所蔵本を列挙した。
- 26) 作者不明。文政十年（1827）刊。
- 27) 斎藤拙堂著、文久元年（1861）刊。
- 28) 『滑稽文学全集』第八巻 文芸書院 1918年 381～396 ページ。
- 29) 『言語文化論集』第XXX巻 第1号 名古屋大学 2008年 3～24 ページ。
- 30) 『にせ物語絵』『伊勢物語』近世的享受の一面」平凡社 1955年 6～36 ページ。
- 31) 寛文三年(1663)版では書名が『草木太平記』と改められている。
- 32) 雑司ヶ谷鬼子母神堂は江戸時代に子育て、安産の神として、信仰を受けた。そして、この神社の絵馬は『鬼子母掲鉢図』の影響を受けているのは明らかである。また、この神社は疱瘡から子供を守る神との信仰も受けている。ところで、鬼子母神信仰では、鬼子母神の子供である愛奴が仏から鉢を被らされたために、鬼子母神を含め、その従属神から見えなくなったとされる。江戸時代の疫病神から子供を守る錦絵等には、しばしば手桶や釜が登場し、桶や釜は子供が被ることで疫病を退散させる呪物とする。この桶や釜と鬼子母神における鉢の説話には何らかの関係がある可能性があり、今後の研究課題としたい。
- 33) 藤岡摩里子「掲鉢図 鬼子母神の説話画」『生活と文化：研究紀要』紀要第14号 2004年 64 ページ。
- 34) 明代末期には文学の中で、異類論争物あるいは争奇類と称される一群の作品があり、二つの対照的な事物の優劣争いを主題としていた、『風月争奇』、『花鳥争奇』、『山水争奇』、『蔬果争奇』、『梅雪争奇』、『童婉争奇』等であり、どれも内閣文庫が所蔵している。『童婉争奇』は林羅山の自筆もある写本であり、十七世紀前半には日本に輸入されていたと考えられている。井原西鶴等の元禄文化にも大きな影響を与えた可能性もある。
- 35) 『探幽縮図』上・下 京都国立博物館蔵版 同朋舎出版 1980年及び1981年版を参照。なお、『探幽縮図』は膨大で、全国に散らばっている資料集であり、その全容は未だに解明されていない。
- 36) 秋田藩では、『佐竹曙山写生帖』、肥後藩では『昆虫胥化図』が有名。
- 37) 指摘した二点から、明末及び清にかけての日本への書籍輸入についても、考察しなければならないと考えている。なお、明代に記された『全

浙兵制考』(十五世紀末)には「附日本風土記」が入っており、今回挙げた野菜品名の殆どが、室町末期においても生産されていた事実が分かる。また、清朝康熙五十四年(1715)にイタリアから宣教師として、中国に渡り、後に清朝の宮廷画家となった郎世寧(カステリオーネ)の作品の日本への影響も含め、考察したい。